

イザヤ書21-23章「嘆く預言者」

1A 荒らす者の到来 21

1B 宴の中にいる者たち 1-10

2B 遠くにいる者たち 11-17

2A 主に目を向けない神の民 22

1B 奢った町 1-14

1C 逃げ去る指導者 1-7

2C 物に目を向ける民 8-14

2B 二人の側近 15-25

1C 自分のために生きる者 15-19

2C 忠実な僕 20-25

3A 富を生み出す町 23

1B 避難する民 1-14

2B 聖なる物となる富 15-18

本文

イザヤ書 21 章から読みます。私たちはイスラエルの周囲の国々に対する神の宣告を読んでいます。前回は、クシュ(エチオピア)とエジプトに対する預言を読みましたが、再び預言はバビロンに戻ります。そして、これまでの裁きの中にも希望に満ちた将来を示していたのに対して、ここは裁かれていってしまう者たちについて、嘆き悲しんでいるイザヤの姿を見ます。私たちが午前中学びました、悔い改めないユダヤ人指導者に対して、エルサレムの神殿の破壊という神の裁きがあることを嘆き悲しんだ、イエス様の姿です。そして、21 章から 23 章には「この世の提供する富や安定に頼っている」人間の姿を描き出しています。使徒ヨハネが話した、「世と世の欲は滅び去りませぬ。(1ヨハネ 2:17)」という内容です。

1A 荒らす者の到来 19

1B 宴の中にいる者たち 1-10

21:1 海の荒野に対する宣告。ネゲブに吹きまくるつむじ風のように、それは、荒野から、恐ろしい地からやって来る。21:2 きびしい幻が、私に示された。裏切る者は裏切り、荒らす者は荒らす。エラムよ、上れ。メディヤよ、困め。すべての嘆きを、私は終わらせる。

「海の荒野」という、何か不気味さを感じさせる表現ですが、これはバビロンを指しています。海であれば荒野などないはずなのに、と思いますが、今であれば衛星写真で上空からバビロンを撮影すると理解できます。イラクの南部には、ユーフラテス川とティグリス川があり、その支流が数多く流れています。しかし、そこは川の周辺は緑地ですが、全体的には荒野です。したがって、この

ような表現をしています。また同時に、霊的な姿も示しているでしょう。ダニエル書には、大海から大国を表す獣が出てきますが、その力ある姿としてバビロンがありました。しかし、最後はメディア・ペルシヤ連合軍によって倒されて、荒地となるという厳しい裁きを示しています。そして、ネゲブはイスラエルの南にある沙漠地帯です。そこに吹くつむじ風は、熱風でたまったものではありません。風と言えば涼くなるというイメージですが、いいえ、とてつもなく熱くなって苦しいです。

そして、これが厳しい幻だとイザヤは言っています。それは、「エラム」と言っていますが、これはペルシヤ地方にある古来からある国の名前です。つまり、メディアとペルシヤが連合して、バビロンを包囲し、攻め込む幻をイザヤは見たのです。

21:3 それゆえ、私の腰は苦痛で満ちた。女の産みの苦しみのような苦しみが私を捕えた。私は、心乱れて聞くにたえない。恐ろしさのあまり、見るにたえない。21:4 私の心は迷い、恐怖が私を震え上がらせた。私が恋い慕っていたたそがれも、私にとっては恐れとなった。21:5 彼らは食卓を整え、座席を並べて、飲み食いしている。「立ち上がれ、首長たち。盾に油を塗れ。」

イザヤが見ているのは、ダニエル 5 章に書かれていることそのものでありました。バビロンの最後の王、ベルシャツアルが宴会を催していました。千人もおり、ぶどう酒を飲んでいました。そして、エルサレムからネブカデネザルが運んできた、神の宮の金や銀の器を使って、バビロンの神々に賛美を捧げていたのです。そこに、壁に人の指が現れました。そして何か文字を書きました。ベルシャツアルは震えあがり、腰の関節が外れたと書いてあります。そこでダニエルが呼ばれました。彼は解き明かしましたが、それは彼の統治がそこで終わり、メディアとペルシヤにバビロンが分けられるというものだったのです。そして、その夜にベルシャツアルは殺されます。5 節に書かれているのは二つの場面です。ベルシャツアルたちが宴会をしている時に、町の外では戦いの備えをしているのです。

そしてこの幻を見た時のイザヤは、とてつもない恐れで身震いし、精神的にも落ち着かなくなりました。彼は、イスラエルの民を踏みにじっていたバビロンに対してでさえも、その滅びを嘆き、恐れていたのです。ここには、イエス様の思いと同じものがあります。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」(ヨハネ 3:16) 神の前にへりくだることなく、救いの機会があったのに、それを見逃して滅んでしまうことに対する激しい嘆きです。

21:6 主は私にこう仰せられた。「さあ、見張りを立たせ、見たことを告げさせよ。21:7 戦車や、二列に並んだ騎兵、ろばに乗った者や、らくだに乗った者を見たなら、よくよく注意を払わせよ。」21:8 すると獅子が叫んだ。「主よ。私は昼間はずっと物見の塔の上に立ち、夜はいつも私の見張り所についています。21:9 ああ、今、戦車や兵士、二列に並んだ騎兵がやって来ます。彼らは互いに言っています。『倒れた。バビロンは倒れた。その神々のすべての刻んだ像も地に打ち砕か

れた。』と。」

イザヤに対して主が、見張りを立たせるように命じました。それで獅子とありますが、見張りのことですが、立たせたら、ペルシヤ地方から来ているので、らくだに乗ってくる連合軍が町の中に進軍してくるのを見ているのです。そして彼らが叫んだのです。「倒れた。バビロンは倒れた。その神々のすべての刻んだ像も地に打ち砕かれた。」バビロンが倒れる時に、彼らの神々の像も倒れたと叫びました。当時の戦争は、国と国が戦う時、その国を代表する神々との戦いであるとみなしていました。それで叫んでいます。

けれども、ここにはそれ以上の意味が込められています。それは、偶像により頼む生活は滅びるということです。偶像とは、自分の願っていることをそのまま神とすることです。神によって私たちは造られ、神のかたちに造られる。神の命令の中に生きることによって、私たちから創造主の姿を人々に見せることができます。それなのに、神よりも自分の願っているほうを優先して、そして自分の思う通りに物事を動かしていき、それをしかも、神の名を使って行っていく。これが偶像礼拝の根っこにあります。こうした生き方は、滅ぼされます。終わりの日に、主が再臨される前に大きな都バビロンが滅ぼされますが、黙示録 18 章にこの箇所が引用されています。「彼は力強い声で叫んで言った。「18:2 倒れた。大バビロンが倒れた。そして、悪霊の住まい、あらゆる汚れた霊どもの巣くつ、あらゆる汚れた、憎むべき鳥どもの巣くつとなった。」

21:10 踏みにじられた私の民、打ち場の私の子らよ。私はイスラエルの神、万軍の主から聞いた事を、あなたがたに告げたのだ。

この世という制度の中で、私たちが生きるのはとても辛いことです。キリストを拒む生活の中にいます。したがって、神を敬うユダヤ人がバビロンの中で味わっていた苦痛は、私たちも共有できるものです。ここでは、「踏みにじられた私の民、打ち場の私の子らよ。」と言っています。踏みにじられ、打ち場で穂が打たれるように私たちも打たれている。しかし、このように世が過ぎ去る時が来るのだ、その時には安息の中に入れるのだと励ましているのです。

2B 遠くにいる者たち 11-17

ところで、この出来事は紀元前 539 年に起こりました。けれども今、イザヤが預言をしているのは、紀元前 700 年代のことです。約二百年後に起こることを預言していました。話は、もっと差し迫ったところに戻ります。バビロンが侵略してくるのはずっと後のこと、その前にアッシリヤがイスラエルとユダ、そしてその周辺地域を攻め入ろうとしています。二つの国に対して預言をします。一つはエドムです。ヨルダンの南部、モアブの南にある国で、死海の南から紅海にまで広がっている国です。そしてエドムはアラビヤに接しており、アラビヤに対する預言を行なっています。

21:11 ドマに対する宣告。セイルから、私に叫ぶ者がある。「夜回りよ。今は夜の何時か。夜回り

よ。今は夜の何時か。」21:12 夜回りは言った。「朝が来、また夜も来る。尋ねたければ尋ねよ。もう一度、来るがよい。」

ドマは「静か」という意味ですが、国はエドムです。「セイルから」とありますね。今、エドムが先ほど登場した見張りに、「夜回りよ。今は夜の何時か。」と聞いています。一度聞いても返事がなかったのでしょうか、もう一度、「夜回りよ。今は何の何時か。」と聞いています。そして、非常にそっけない返事をイザヤがしています。

アッシリヤが勢力を拡大しています。エドムはモアブの南にある国ですが、モアブが踏み荒らされたのですから、自分たちも踏み荒らされるのかどうか、尋ねています。これをエドムは「夜」と例えているのです。ユダの周辺諸国は、アッシリヤの脅威に対して、活発な外交活動を展開させていました。それでエドムがユダにも使いを送って、聞いたのです。アッシリヤの脅威が去るのはいつなのか、アッシリヤから解放されて朝になるのはいつぐらいなのか、と。それに対するイザヤの答えは、「夜が明けても、また夜になるよ。」でした。具体的には、紀元前 715 年にアッシリヤの王サルゴンによって攻めてこられました。しかし、それからバビロンが来る時にはバビロンがユダを滅ぼしたので、ヘブロンの方へ移住しました。そして、彼らは新約時代にはイドマヤ人と呼ばれます。ヘロデはイドマヤ人です。そして次第に歴史から姿を消します。

主の預言者は、主の心を代表しています。イザヤのそっけない返事は、主ご自身がエドム人に対して語るべき言葉が少ない、ということです。それはエドム人自身が、神に関する事柄について無関心だからです。先祖エサウが、一杯の食物と引き換えに長子の権利を売ったことを思い出してください。神のことを度外視していました。それで神もエサウに対しては何も語る事がおできになりませんでした。イドマヤ人であるヘロデに対して、主は何かお語りになったのでしょうか？ピラトがエルサレムに訪問中にヘロデのところへイエスを送った時、ヘロデはいろいろな質問をしましたが、イエス様は完全に口を閉ざした状態でした(ルカ 23:9)。ヘロデの質問は真摯なものでは全くなく、イエス様が何か奇蹟を行なう魔術師のように考えていたのです。

21:13 アラビヤに対する宣告。デダン人の隊商よ。アラビヤの林に宿れ。21:14 テマの地の住民よ。渴いている者に会って、水をやれ。のがれて来た者にパンを与えてやれ。21:15 彼らは、剣や、抜き身の剣から、張られた弓や激しい戦いからのがれて来たのだから。21:16 まことに主は私に、こう仰せられる。「雇い人の年期のように、もう一年のうちに、ケダルのすべての栄光は尽き果て、21:17 ケダル人の勇士たちで、残った射手たちの数は少なくなる。」イスラエルの神、主が告げられたのだ。

アラビヤは、今のサウジアラビアの地域に住んでいた人々です。イシュマエルの子孫であり、アラビヤ人です。ここの預言はエドムの時と同じく、715 年にアッシリヤによって攻めてこられました。デダンの隊商らが今、逃げています。それでアラビヤの林に隠れています。そして、テマの地

の住民が、その避難してきた人々に食糧や水を与えています。そして、モアブの時のように時が決まっている。もう一年すれば必ず、勇士たちの数は減ると宣告しておられます。アラビアの地域の各部族たちは、互恵関係によって自分たちを守ろうとしたのだが、それは駄目になるということです。どんなにその社会の中では互いに助け合う制度がしっかりしていても、イスラエルの神、主に頼り頼まなければ滅んでしまう、という警告の御告げなのです。

ここから私たちは何を学ぶことができるでしょうか。エドムもまたアラビアも、アッシリヤが攻めてくることについては、他のダマスコ、モアブ、ペリシテ、ユダよりも、危険度が少ない、地形的に遠くにあるところなのです。そこで、彼らはアッシリヤが他の国々に攻めてきたとしても、エドムの場合は自分のこととはあまり受けとめていない。そしてアラビアは、自分たちで助け合うことによって何とかやっていけると思っていました。このようにして、主がアッシリヤを通してわたしにより頼みなさいということを行っているところに、自分たちと主との大きな距離を置いているのです。私たちにとっての敵は、「無関心」です。自分と神とはあまり関わりがないということです。また、自分を助けてくれる制度があるとそれにより頼んで、神により頼む必要性を感じません。

2A 主に目を向けない神の民 22

1B 奢った町 1-14

1C 逃げ去る指導者 1-7

22:1 幻の谷に対する宣告。これはいったいどうしたことか。おまえたちみな、屋根に上って。22:2 喧噪に満ちた、騒がしい町、おごった都よ。おまえのうちの殺された者たちは、剣で刺し殺されたのでもなく、戦死したのでもない。22:3 おまえの首領たちは、こぞって逃げた。彼らは弓を引かないうちに捕えられ、おまえのうちの見つけられた者も、遠くへ逃げ去る前に、みな捕えられた。

またもや、意味深で、少し不気味な言葉が出てきました。「幻の谷」です。これは読み進めれば分かりますが、エルサレムのことです。「谷」というのは、エルサレムは谷に囲まれている都だからです。東はケデロンの谷、西から南にヒノムの谷があります。そして、「幻」とは、数々の預言者が預言を行なった町だということです。したがって、エルサレムは数々の神の御言葉が語られており、その幻によって立っているところになっているはずなのです。ところが、ここにあるように「喧噪に満ちた、騒がしい町、おごった都」となっていた、主に関わることは度外視していたということになります。イザヤ 19 章にもありました、ダマスコに対する宣告の中に北イスラエルの姿がありました。周辺の諸国と同じように世的になってしまっていることを示しています。

1 節に「おまえたちみな、屋根に上って。」とあります。これは、アッシリヤ軍が包囲しているのを屋上に上がって見ている姿です。そして 2-3 節を見ると、この危機に指導者が先頭に立って指揮しなければならぬところ、アッシリヤの情報を早く聞きつけていたので、自分たちのことだけ考えてなんとエルサレムを捨て、逃げて行ってしまったのです。ところが、アッシリヤによって捕えられています。神の幻の中に生きない神の民です。これは悲惨です。指導者が、我先に自分のことだ

け考えて動いている姿です。

22:4 それで、私は言う。「私から目をそらしてくれ、私は激しく泣きたいのだ。私の民、この娘の破滅のことで、無理に私を慰めてくれるな。」

イザヤが嘆いています。バビロンが滅びる姿に嘆いていましたが、ここでは自分の民、自分の娘、まさに神に選ばれ、召されているところの民が滅びようとしているのを目の当たりにしているからです。これこそ、神の預言者として気が狂いそうに苦しいことでしょう。

22:5 なぜなら、恐慌と蹂躪と混乱の日は、万軍の神、主から来るからだ。幻の谷では、城壁の崩壊、山への叫び。22:6 エラムは矢筒を負い、戦車と兵士と騎兵を引き連れ、キルは盾のおおいを取った。22:7 おまえの最も美しい谷は戦車で満ち、騎兵は城門で立ち並んだ。

21章のエラムはペルシヤを指していましたが、ここでのエラムは当時そこを征服していたアッシリヤのことです。彼らが軍隊をその谷に満たして、城門で立ち並んでいます。そして、それが万軍の主から来ているということがここに書いてあります。そして、この恐慌と蹂躪と混乱は主ご自身から出たということです。

ここで私たちも、キリストによって神の民となった者として考えなければいけません。私たちに向かってくる恐れというものが、主ご自身がからのものであることを受けとめる必要があります。主が恐れを引き起こす？神は愛であり、完全な愛は恐れを締め出すのではないか？と思われるでしょう。恐れと信仰は相容れないということもできます。全くその通りです。しかし、恐れや心の揺れが心に与えられるということは、そこで主にのみ拠り頼まなければいけないという祈りへと変えられるので、主から来ているのです。神こそが自分の救い主であることを知るために、主が敢えて恐れを引き起こしているということです。

私たちは、テロリズムが拡散する時に生きています。そして、これまで安定していると思っていたものが実は頼りにならないというものが、ますます多くなっています。そこで、私たちが世と同じように反応してよいのでしょうか？ある人は、自分だけを求めます。またある人は、表にその不安を出して行動に移します。しかし、それは神から幻を受けた民の姿ではありません。幻を受けた民は、これらのことは起こるということを知っています。終わりの日に起こることを、イエス様は弟子たちに語られました。だからこそ、世において神の子どもとして輝く機会が与えられているのです。このような暗き世だからこそ、キリストにある希望を輝かすことができる時はないのです。ですから、この世と同じように反応しては、まさにこここのエルサレムの住民のようになってしまいます。

2C 物に目を向ける民 8-14

22:8 こうしてユダのおおいは除かれ、その日、おまえは森の宮殿の武器に目を向けた。22:9 お

まえたちは、ダビデの町の破れの多いのを見て、下の池の水を集めた。22:10 また、エルサレムの家を数え、その家をこわして城壁を補強し、22:11 二重の城壁の間に貯水池を造って、古い池の水を引いた。しかし、おまえたちは、これをなされた方に目もくれず、昔からこれを計画された方を目にも留めなかった。

歴代誌第二 32 章に、ヒゼキヤ王がこれらのことを行なったことが書いてあります。彼自身は主に拠り頼みなさいと鼓舞していましたが、一部には心はそこにあらずの人々がいたということです。この恐怖が主によって計画されていたことなのだ、とはっきりと言っています。いつになったら、それに気づくのか？と主の叫び声がここにはあります。となると、私たちはこの安全で強く、豊かな日本という国に生きていますが、主は声を次第に大きくして、わたしのほうに目を向けなさいと語っておられることに気づくはずです。自分たちではどうしようもない状況なのだ、ということを見て、それで主のみに解決があることを認めるべきなのです。

イエス様が、同じことをユダヤ人に語りました。「ルカ 13:4-5 また、シロアムの塔が倒れ落ちて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも罪深い人たちだったとでも思うのですか。そうではない。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」ここで、このような悲劇が起こった時に私たちの心が騒ぎ、そして主に対して御心を求めて祈るのであれば、それが神の目的です。しかし、「ああ、不幸な人だったね」とか「自分に降りかからなくてよかった」とか、または、「何が原因だったのだろう。何か彼らに不正や罪があったから、そうなったのではないか。」とか言っているのであれば、まだ自分のことだと受けとめていない証拠なのです。

22:12 その日、万軍の神、主は、「泣け。悲しめ。頭を丸めて、荒布をまとえ。」と呼びかけられたのに、22:13 なんと、おまえたちは楽しみ喜び、牛を殺し、羊をほふり、肉を食らい、ぶどう酒を飲み、「飲めよ。食らえよ。どうせ、あすは死ぬのだから。」と言っている。22:14 そこで万軍の主は、私の耳を開かれた。「この罪は、おまえたちが死ぬまでは決して赦されない。」と、万軍の神、主は仰せられた。

最後に、もうアッシリヤによって殺されるということが分かった時に、主に対して叫んで嘆いて、自分の身を低くすればよいのに、そうではなく「今を楽しもう」となってしまうました。それで主は、最後通牒を出します。「死ぬまで、あなたの罪は決して赦されない。」と言われます。罪を赦すその機会が失われた、ということです。これは恐ろしいことですが、救いの機会はいつまでも与えられているわけではありません。主が定められた時が来れば、滅びに至るしかないのです。

政治の話になって申し訳ありませんが、ある牧師さんが自分のツイートでこんなことを言っていました。安保法制が国会を通過するかどうかの時期です。その時に、「安保法制反対！」というツイートが流れ、また「賛成」というツイートが流れ、それから全く無関心で、何事も起こっていないか

のように過ごしているツイートが流れていて、「なんと、ここまではっきり原色のように分かれているのか。」とつぶやいていました。同じことが、2011年以降、原発事故で起こりましたね。安保法制に反対や賛成と両極端に分かれるのは、自分が安心できる領域が侵されてしまった、不安になったからに他なりません。そして無関心なのは、ここにあるとおりです、今の自分さえ良ければいいのだ、という考えです。

私たちキリスト者は、本来、どう反応すべきなのでしょう？そうです、祈ることです。しかも、自分の心の不安に引っ張られて祈るのではなく、主の前に静まります。主が今、自分に何を語っておられるのか、聞くようにして祈ることです。そして、悔い改めなければいけないところがないかを、主に心を探っていただくことです。このような危機は、私たちの本当の姿を自分自身が知ることのできる、またとない機会なのです。

2B 二人の側近 15-25

そして次に二人のヒゼキヤの側近が出てきます。一人はシェブナ、もう一人はエルヤキムです。二人とも、ヒゼキヤ王の下で働いていた議官であり、アッシリヤのラブ・シェケがエルサレムの住民に向かって脅しをかけていたとき、その言葉を聞いて、ヒゼキヤに報告した人々の中にいた二人です(36:22)。

1C 自分のために生きる者 15-19

22:15 万軍の神、主は、こう仰せられる。さあ、宮廷をつかさどるあの執事シェブナのところに行け。22:16 あなたは自分のために、ここに墓を掘ったが、ここはあなたに何のかかわりがあるのか。ここはあなたのだれにかかわりがあるのか。高い所に自分の墓を掘り、岩に自分の住まいを刻んで。22:17 ああ、ますらおよ。主はあなたを遠くに投げやる。主はあなたをわしづかみにし、22:18 あなたをまりのように、くるくる丸めて、広い広い地に投げ捨てる。あなたはそこで死ぬ。あなたの誇った車もそこで。主人の家の恥さらしよ。22:19 わたしはあなたをその職から追放し、あなたの地位から引き降ろす。

シェブナは、まさにエルサレムをこの世的にした張本人ということができるでしょう。彼はまた、主に拠り頼むのではなく、エジプトにより頼むように仕向けた人かもしれません。そして、アッシリヤの危機が迫ると、一目散に逃げたのですが、遠い所で殺されました。興味深いのは、自分が死ぬための墓をしっかりと整えていたということです。これは、当時の石棺にはいろいろな装飾をすることができ、また岩を掘ることで葬るようになっていました。つまり、自分のことしか考えていなかったということです。主は彼を追放しました。自分からエルサレムを出ていったのですが、主はエルサレムにアッシリヤを送ることによって、この世的な者を追い出されたのです。

2C 忠実な僕 20-25

22:20 その日、わたしは、わたしのしもべ、ヒルキヤの子エルヤキムを召し、22:21 あなたの長服

を彼に着せ、あなたの飾り帯を彼に締め、あなたの権威を彼の手にゆだねる。彼はエルサレムの住民とユダの家の父となる。

シェブナとは対照的な人がいました、エルヤキムです。彼のような存在があったので、王ヒゼキヤはある意味、霊的に守れていたのかもしれませんが。「あなたの長服」「あなたの飾り帯」「あなたの権威」というのは、シェブナのことです。シェブナにあった高い地位が、エルヤキムに移ったことを意味します。主はこのような選り分けをししばしば行われます。世を求めれば離れていくようにさせ、けれども忠実な者にその職を与えます。

22:22 わたしはまた、ダビデの家のかぎを彼の肩に置く。彼が開くと、閉じる者はなく、彼が閉じると、開く者はない。22:23 わたしは、彼を一つの釘として、確かな場所に打ち込む。彼はその父の家にとって栄光の座となる。22:24 彼の上に、父の家のすべての栄光がかけられる。子も孫も、すべての小さい器も、鉢の類からすべてのつぼの類に至るまで。

エルサレムの町全体が世的になっていた中で、エルヤキムは主に忠実でいることができました。それゆえ、エルサレム全体が救われました。そこでエルヤキムにダビデの家の鍵が任せられます。これは、彼の肩に鍵があるとありますが、王の最も位の高い側近は、王宮の大きな鍵が衣服の肩に置かれているようなものを身に付けます。これは、ダビデの家のことが一切任されている、大きな権威が与えられるということです。しかし、実はこの時点でエルヤキム本人に与えられたものから、キリストご自身の預言へと変わっています。「黙示 3:7 また、フィラデルフィヤにある教会の御使いに書き送れ、『聖なる方、真実な方、ダビデのかぎを持っている方、彼が開くとだれも閉じる者がなく、彼が閉じるとだれも開く者がなく、その方がこう言われる。』黙示録の七つの教会、フィラデルフィヤにある教会に現れたキリストが、ダビデの鍵が与えられている者、開くと閉じる者がなく、閉じると開く者がなくという権威が与えられています。

そして、「一つの釘」というのは、家の中で容器を整理する時に、食器棚のようなものはありませんでした。壁に打ち付けた釘にかけていました。したがって、ここでは、この忠実な僕によって彼の家、つまりユダヤ人が全て支えられていたということになります。この方により頼んでいることによって、彼らに神に栄光が与えられるはずだったのです。

22:25 その日、万軍の主の御告げ。確かな場所に打ち込まれた一つの釘は抜き取られ、折られて落ち、その上にかかっていた荷も取りこわされる。主が語られたのだ。

これが、イエス様が抜き取られた、つまり十字架に付けられたという預言です。イスラエルを救う方が断られました。それゆえ、ユダの家全体が倒れてしまいました。つまり、ユダヤ人は過去にヒゼキヤの時代に犯した過ち、シェブナが犯した過ちを、キリストが来られた時にも犯してしまったということです。ローマという勢力が彼らを支配していました。そして、ユダヤ人たちがローマに反乱を

起こしました。そしてその戦いで、ローマはエルサレムを包囲して、神殿を滅ぼしてしまい、彼らが世界の離散の民となるのです。イエス様を十字架につけた、ユダヤ人の宗教指導者たちは同じように自分たちの地位を脅かされていたので、殺したのです。世的になっていたのです。私たちの心に、自分の生活の安定を求めて、それゆえに神の動かそうとしておられることを拒んでいないか？このことを点検する必要があります。

3A 富を生み出す町 23

そして23章に入ります。21章から23章まで、人々を安定させ、安心させる最も大きな要因、富に対する神の裁きが書かれています。世界の富を動かしていたツロに対する宣告です。

1B 避難する民 1-14

23:1 ツロに対する宣告。タルシシュの船よ。泣きわめけ。ツロは荒らされて、家も港もなくなった、とキティムの地から、彼らに示されたのだ。23:2 海辺の住民よ。黙せ。海を渡るシドンの商人はあなたを富ませていた。23:3 大海によって、シホルの穀物、ナイルの刈り入れがあなたの収穫となり、あなたは諸国と商いをしていた。23:4 シドンよ、恥を見よ、と海が言う。海のとりでがこう言っている。「私は産みの苦しみをせず、子を産まず、若い男を育てず、若い女を養ったこともない。」23:5 エジプトがこのツロのうわさを聞いたなら、ひどく苦しもう。

ツロは今のレバノン南部にあります。かつての都市国家です。アッシリヤやバビロンのように広大な土地を持っていません。しかし彼らの舞台は地中海です。世界貿易の中心の都市として膨大な富を蓄積し、その経済力によって世界を動かしていました。今で言ったら、ドバイみたいなところでしょうか。その世界に台頭した帝国であるアッシリヤは、ツロの町を破壊しました。

ところで、ダビデが王となった時に、その王宮を立てるためにツロの王が杉材と建築家を送りましたし、ソロモンの時もヒラムとの関係は良好でした。ですから他の周囲の国々と異なり、戦ったことがありません。しかし、イスラエルによってとてつもない大変なことが起こりました。ツロの王ではないですが、同じフェニキアのシドンの王の娘、イゼベルをアハブが自分の妻にしました。それでバアル信仰がイスラエルの中に入り込みました。同時に、エリヤはシドンのところに主に呼ばれていきました。そこにいるやもめとその息子の家に泊まり、それでパンのための粉と油が尽きなかったという奇蹟があります。イスラエルにとってつまずきをもたらした国であると同時に、主に聖別された者を起こした国でもあります。

タルシシュは、おそらく今のスペイン北部にある町で、鉱石で有名だったところではないかと言われています。当時の世界でもっとも遠くに航行することができる船として、「タルシシュの船」と呼ばれているわけです。ツロが破壊されました。そこでツロによって収益を得ていた者たちが海の向こうから自分たちの損失を嘆き、泣き喚いているのです。「キティム」とはキプロスのことです。地中海に浮かぶ、ツロの近くにある島ですね。そこからツロがなくなったことを嘆いています。そして、シ

ドン、ツロの北にある町ですね。ツロとともにフィニキヤ人つまりカナン人の都市国家として栄えていたところで、彼らの働きでツロが豊かになっていました。そして、エジプトを相手に貿易していました。「シホルはエジプトからのもの、そしてナイルの刈り入れ」とあります。

したがって、ツロには労することなく富が集積されていったのです。それで、「私は産みの苦しみをせず、子を産まず、若い男を育てず、若い女を養ったこともない。」と言いました。いかがでしょうか、こんな生活があったら楽しいですか？育てていくという労苦なしで生きていくこと。そこには命がありませんね。そして、苦しみが無いところには高ぶりがあります。私たちは、いつの間にか効率の良いこと、楽にできること、そういったものを選ぼうとしてしまいます。しかし、キリストの道、また神の命は、愛があり、労苦があるところにあります。イエス様は、「貧しい者が幸いである」「悲しむ者が幸いである。」と言われました。私たちは何かにつけ欠乏している、事足りない、つぶされるというところに永遠の命があり、それゆえ喜びがあるのです。

23:6 海辺の住民よ。タルシシュへ渡り、泣きわめけ。23:7 これが、あなたがたのおごった町なのか。その起こりは古く、その足を遠くに運んで移住したものを。23:8 だれが、王冠をいただくツロに対してこれを計ったのか。その商人は君主たち、そのあきゅうどは世界で最も尊ばれていたのに。23:9 万軍の主がそれを計り、すべての美しい誇りを汚し、すべて世界で最も尊ばれている者を卑しめられた。

ツロが破壊されたので、その住民は避難民となっています。泣きわめいています。主はこれまでも、それぞれの国に栄光が衰える宣言をされましたが、ここではツロの栄光が「王冠」を持っているとまで言われています。それは、数々の国々がツロとの交易を行っており、世界がこれに頼っていたからです。そして、これを卑しめられたのは他でもない、主ご自身なのだということを強調しています。アッシリヤは、エルサレムに対しては恐怖をもたらすのに用いられましたが、ツロに対しては卑しめをもたらすために用いられました。

箴言にあるように、高慢は破滅に先立ちます。したがって、その人が倒れる時はとても見るに堪えないものです。そして富は、私たちが神以外のものに頼らせる高ぶりを形成します。「1テモテ6:17この世で富んでいる人たちに命じなさい。高ぶらないように。また、たよりにならない富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。」

23:10 タルシシュの娘よ。ナイル川のように、自分の国にあふれよ。だが、もうこれを制する者がいない。23:11 主は御手を海の上に伸ばし、王国をおののかせた。主は命令を下してカナンのとりにてを滅ぼした。23:12 そして仰せられた。「もう二度とこおどりして喜ぶな。しいたげられたおとめ、シドンの娘よ。立ってキティムに渡れ。そこでもあなたは休めない。」23:13 見よカルデヤ人の国を。この民はもういない。アッシリヤ人がこれを荒野の獣の住む所にした。彼らは、やぐらを立

てて、その宮殿をかすめ、そこを廃墟にした。23:14 タルシシュの船よ。泣きわめけ。あなたがたのとりでが荒らされたからだ。

カナンの砦をアッシリヤが倒して、それで洪水のようにツロの住民は外に逃げていきます。そして 13 節に、カルデヤ人の国とありますが、これはバビロンのことです。バビロンと言ってもまだ小国の時で、アッシリヤに対抗していたメロダク・バルアダン(39:1)という王です。アッシリヤによってバビロンが荒らされたのですが、その同じアッシリヤがツロの砦を荒らすと宣言しています。

ツロに対する、その高ぶりを破壊する預言は繰り返されています。アッシリヤの後に、バビロンが来てこれを破壊します(エレミヤ 47:4)、そしてバビロンの後に、ギリシヤの王アレクサンドロスが来て、徹底的に破壊しました(エゼキエル 27-28 章)。そして、ツロに対する預言は、終わりの日には黙示録 18 章、バビロンに対する預言となっていますが、まさにツロと同じような、世界の王たちがここから利益を得て、商人たちがバビロンの破壊を嘆く、同じ流れの預言を見ます。日本も含めて、この制度に世界が組み込まれています。そして、イエスを自分の救い主と認めていない人は、突然の破壊に泣きわめくこととなります。

ビリー・グラハム伝道協会のウェブサイトで、「魂の価値」という題名の動画を見ました。そこには、フランクリン・グラハムが説教している場面が出てきますが、「人は、たとえ全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。(マルコ 8:36)」の御言葉を引用していました。そのビデオの始まりは、紐につるされている一軒の家が出てきます。その紐が切れそうになって、家全体が落ちていってしまう場面が出てきます。人生の中で、自分の支えとなっていたものが突然なくなった時、どれだけそれが自分にとって頼りにしていたか分かる、ということです。私たちは終わりの時に近づいています。キリストこそが望みであるというところに立つことが迫られています。さもないと、ツロと同じように、何もなくなってしまい、その最後は悲惨になるからです。

2B 聖なる物となる富 15-18

23:15 その日になると、ツロは、ひとりの王の年代の七十年の間忘れられる。七十年が終わって、ツロは遊女の歌のようになる。23:16 「立琴を取り、町を巡れ、忘れられた遊女よ。うまくひけ、もっと歌え、思い出してもらうために。」23:17 七十年がたつと、主はツロを顧みられるので、彼女は再び遊女の報酬を得、地のすべての王国と淫行を行なう。23:18 その儲け、遊女の報酬は、主にささげられ、それはたくわえられず、積み立てられない。その儲けは、主の前に住む者たちが、飽きるほど食べ、上等の着物を着るためのものとなるからだ。

遊女も七十年経てば、老女になりますね。自分で呼び寄せて、自分の客を探している歌が、この歌です。おそらくこの七十年は、アッシリヤがツロを攻めたが、アッシリヤがバビロンにとって代わった時に独立を回復した期間のことと思われる。再び貿易を開始するのですが、これまでと違い、富の蓄積がそれほどできなくなることを示しています。そして次第に、主にその富が用いられ

るようになるのだ、ということです。かつてソロモンの神殿のために、ツロの杉材や建築士などが用いられましたが、再びそのように主の御用のためにその富が用いられる時が来る、ということです。エズラ 3 章 7 節に、バビロンから帰還したユダヤ人の建てる神殿再建に、ツロとシドンから来た人々がいることが言及されています。

これは、この世の富は最終的には主のところを持っていかれることを示しています。主に属している富が、正しく主にお返するという状態に回復するのです。終わりの日、キリストが御国を立てられる時は、エルサレムに国々の富が運ばれてきて、それで主への捧げ物となります。私たちはそれを、今の時代にも、献金という形で行いなさいと命じられています。不正の管理人の喩えで、イエス様はこのように言われました。「ルカ 16:9 そこで、わたしはあなたがたに言いますが、不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうしておけば、富がなくなったとき、彼らはあなたがたを、永遠の住まいに迎えるのです。」つまり、私たちの持っている具体的な財産、それを永遠の住まいのために積極的に用いていきなさいということです。いずれ主が再臨されたら、物理的に世界の富が主のもとに動いていきます。

私たち人間が主のところに行かせまいとする、その高ぶりは、自分が持っている物があるからだということが分かったかと思います。そのために、主はアッシリヤのような人に恐れを呼び起こすようなものを用いられます。心に出てくる不安、これは主に拠り頼むことのできる良い機会です。しかし、その機会を失うとそこには破滅しかありません。その破滅を予期して、イザヤは嘆きました。私たちも、未だイエス様を心にお迎えしていない人々のことを考えると、その行く末を考えると、いたってもいられない気持ちになりますね。しかし、悩んでいいのです。嘆いてよいのです。その悩みと嘆きは、主から来ているものです。預言的な働きを私たちは任されています。その先を見て、泣くのです。しかし、エルヤキムのように主に忠実な人も起こされています。私たちは、エルサレムに幻が与えられているように、主の幻をしっかりと見据えていることができますように。